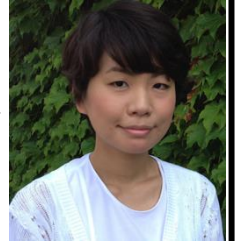


写真をめぐる新しい「災害アーカイブ」のかたち

「開かれた」災害アーカイブ活動の可能性

大阪大学大学院人間科学研究科

博士後期課程 高森順子



1. 写真をめぐる災害アーカイブ活動

東日本大震災以降、災害の記憶をあらゆる媒体に記録し、次世代に伝える活動である「災害アーカイブ」活動は広がりを見せている。特に、記録媒体のひとつである「写真」に関しては、カメラ機能付き携帯電話の普及によって誰もが日常的にカメラを持ち歩くようになった社会背景もあり、かつてないほど多くの人々によって、それぞれが立ち会った被災の瞬間が大量に撮影され、デジタルデータとして残されるようになった。

大量に残された「被災の断片」をどのように収集し、保存し、伝えるか。写真をめぐる災害アーカイブ活動は、現在も公共民間を問わず、大小様々な組織によって模索が続けられている。大きな潮流のひとつとして、デジタルアーカイブを構築して運用する役割を、国や大学機関が主導するようになってきたことが挙げられる。例えば、国会図書館が行っている「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ『ひなぎく』」では、写真をはじめ、動画・音声・ウェブサイト等、あらゆるデジタルデータが収集・公開され、その総数は写真のみに絞っても約 39 万点にのぼる（国立国会図書館, 2015）。また、デジタルアーカイブのほとんどは、現在も収集活動を継続しており、被災の全容と、被災後から現在までの変遷を把握するためのアーカイブとして、成長を続けている。

一方、デジタルデータとして保存されていない、それぞれが唯一無二の現像写真をめぐる特筆すべき活動として、「写真レスキュー」「写真返却」と呼ばれる活動が挙げられる（補注 1）。この活動は、津波流出などの被災によって散逸した写真やアルバムを回収し、それを洗浄、修復し、かつての所有者の元へ返す

活動である。東北沿岸部各地の自治体や民間団体によって拾い上げられ、整理された写真は、かつての所有者の個人的な記録であるとともに、被災前のまちなみを知る、集合的な記録でもある。写真返却活動を、被災前のまちと、そこに暮らす人々の記録を扱う取り組みとして意味付けると、広義の「災害アーカイブ」活動として捉えることもできるだろう。

このように、写真をめぐる災害アーカイブ活動は、被災の全体像と、被災後の変遷を把握するための活動から、被災前の地域の記憶に関する活動まで、その範疇は広い。言い換えれば、災害アーカイブ活動は、被災前、被災時、被災後の地域の記憶を対象とする、現在進行形の社会的実践であるといえるだろう。

本論では、そのような活動のなかでも、東日本大震災から 4 年目、および、阪神・淡路大震災から 20 年目の都市部で現在行われている活動に焦点を当てる。本論で紹介する災害アーカイブ活動は、ともに、「アーキビスト」や「ライブラリアン」といった専門家のみによって行われるのではなく、誰もが参加することができる可能性を持つ活動である。本論では、このような神戸と仙台の活動の事例を徹視的に記述することを通じて、誰もが参加できる「開かれた」災害アーカイブの可能性を考える。

2. 「20 世紀アーカイブ仙台」の写真をめぐる災害アーカイブ活動

2015 年 3 月、せんだいメディアテーク 7 階で、企画展「レコーディング イン プロGRESS 3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター活動報告展」が開催された。この企画展は、東日本大震災後から約 2 ヶ月後に、メディアテークと市民、専門家、アーティスト

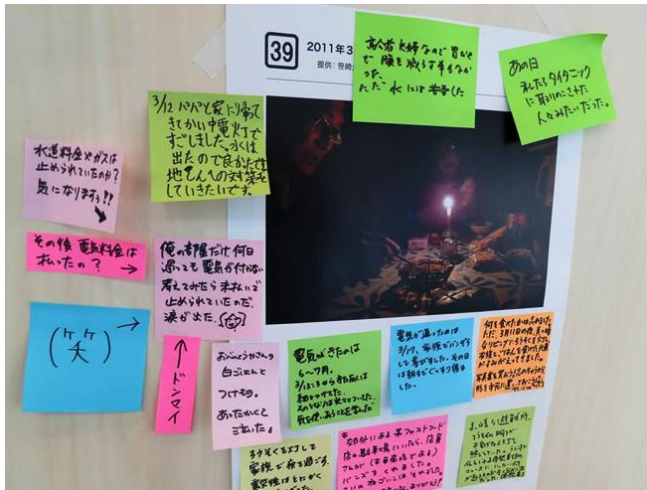


写真1 「はじまりのごはん」

が協働し、独自に復旧、復興のプロセスを記録し発信していくプラットフォーム「3がつ11にちをわすれないためにセンター（略称：わすれん!）」の4年間の活動展示である。5つのブロックに分けられたこの企画展の後半に、「アーカイブ活動における資料化の試み／はじまりのごはん」と題された展示がある。

スーパーに並ぶ長蛇の列、笑顔で食卓を囲む若者たち、棚にほとんど商品が置かれていないコンビニの一角。ここには、震災から間もない頃の個人が撮影した「食事」に関する写真数十点がポスター紙に印刷され、掲示されている。展示の近くにはテーブルがあり、付箋紙とペンが置かれ、「展示写真を見て 思い出したこと 伝えたいことなど ふせんに書いて 自由に貼ってください」との案内がある。付箋紙に熱心にペンを走らせる人、写真に付された付箋紙を静かに読み進める人、写真の前で思い出したことを話す人々など、来場者は思い思いの過ごし方をしている。

写真1はその展示の一部である。ポスター上部には、「2011年3月12日 提供：笹崎久美子さん」と書かれているが、その一部は展示期間中に貼られた付箋紙によって隠れてしまっている。ローソクの火を囲み食事をする人々の写真を取り囲むようにして、色とりどりの付箋紙が貼られている。「電気が通ったのは3/17、家族でバンザイして喜びました。その日は朝までぐっすり寝ました」「真っ暗な避難所、ろうそく

の明かりが不安げな人たちを照らしていた。ラジオが（ママ）伝えられる原発事故のニュースに、いったい何が起きたのか分からなかった」「おべんとうやさんの白ごはんとつけもの。あったかくて泣いた」「あの日わたしたちタイタニックに取り残された人々みたいだった」。付箋紙に書かれる事柄は、写真そのもの、または、付箋紙に書かれた他の来場者の言葉から想起した、震災の経験の断片である。「俺の部屋だけ、何日経っても電気が付かない。考えてみたら未払いで止められていたのだ。涙がでた」との付箋紙には、「ドンマイ」「(笑)」「その後電気料金は払ったの?」「水道料金やガスは止められていたのか? 気になりますう!!」と付箋紙が重ねられ、付箋紙のなかで繰り返される会話に思わず笑みがこぼれる。

「はじまりのごはん」は、2014年10月にメディアテークで行われた企画展「3月11日はじまりのごはん」をもとに、再構成されたものである。この企画は、仙台を活動拠点とする市民アーカイブ団体「NPO法人20世紀アーカイブ仙台」と、メディアテークによって共同で企画運営された。この展示の素材となった写真は、同団体が震災当時にtwitterを通じて呼びかけ集めた震災に関するものであり、2012年3月に写真集『3.11 キラクのキラク 市民が撮った3.11大震災 記憶の記録』としてまとめられたものの一部である。

20世紀アーカイブ仙台は、仙台の明治・大正・昭和の8mmフィルムや写真を集め、公開することをはじめ、地域の記憶に関する取り組みを震災前から行ってきた。震災後は、これまでの取り組みと平行して、震災の記憶の記録化に取り組んできた。そのような活動変遷から生まれた「はじまりのごはん」という災害アーカイブ活動は、どのような特徴を持っているのか。この取り組みの中心人物である同団体の副理事長、佐藤正実さんのインタビュー（補注2）をもとに、活動の特徴を以下に述べる。

（1）写真の背景情報を意図的に一部欠落させる

「はじまりのごはん」では、震災の「食事」にまつ

わる写真と、その写真の撮影日と提供者（撮影者）の情報が展示される。展示期間中に、来場者はそれらの情報から想起した事を思い思いに付箋紙に書き綴り、展示物に貼りつけていく。ここで注目すべき点は、展示される写真それぞれに対して、撮影された場所や、写真の状況を説明するキャプションが付けられていないことである。写真展示の場合、写真と共に、撮影日・撮影場所・撮影者・写真を説明するキャプションを付随して展示することが一般的である。前述したように、「はじまりのごはん」の展示は、20世紀アーカイブ仙台が出版した写真集の一部が素材として使われており、写真1で示した展示例の場合、写真集には「仙台市太白区」のページにその写真が掲載され、写真下には「停電のためローソクの下で 2011年3月12日／笹崎久美子」とキャプションが付けられている（NPO法人20世紀アーカイブ仙台, 2012: p.99）。つまり、この企画展で使用されている写真には、それぞれに、通常の写真展示を可能にする情報があつたにもかかわらず、その情報を記載していないのである。ではなぜ、展示にあたり、あえて情報を一部削ったのだろうか。

同団体の佐藤正実さんは、「はじまりのごはん」は、「いつ、どこで撮ったものなのかわからない、『資料』になりえていない資料』を活用するための方法」として行った企画展示「どこコレ? おしえてください昭和のセンダイ」に着想を得て、発展させたものである



写真2 「どこコレ?」展示の様子

という。「どこコレ?」は、20世紀アーカイブ仙台とメディアテークの共同企画として、2013年1月から1ヶ月半にわたって行われ、今年4月に4回目を迎える継続的な取り組みである（写真2）。「どこコレ?」では、20世紀アーカイブ仙台が所蔵する、撮影時期や場所が分からない写真が展示され、来場者がその写真にまつわる情報を付箋紙に記し、貼付することで、写真の背景情報を確定することを目的としている。佐藤さんは、この展示をはじめて間もなく、展示した写真の時代背景を知っているお年寄りの方が、若い人に写真の場所の詳細や、思い出を語っている場面など、自然と会話が生まれていることに気づいたという。

「震災に関して、特に仙台の都市部では話す機会がほとんどない。そういう「語り場」を作ることができないか。メディアテークの「わすれん!」とそのような場を作れないかと協議する中で、「どこコレ?」の型をベースにして発展させようという話になった。このような経緯で企画された「はじまりのごはん」は、個人が撮影した「食事」という身近な行為に関する写真を、背景情報を削り、一歩抽象化して展示することによって、来場者がそれぞれの被災にまつわる体験を想起し、自然な対話を生み出すための場として機能することが目指された。

（2）「参加」を促さずに、待つ

「どこコレ?」に着想を得た「はじまりのごはん」は、似て非なる特徴がいくつかある。なかでも、大きな違いとして、「来場者に声をかけない」という特徴がある。「どこコレ?」では、期間中にスタッフが常駐し、来場者に声をかけ、参加を促している。一方、「はじまりのごはん」では、期間中スタッフは常駐せず、声をかけるなどの参加を促す行為もしない。佐藤さんはその理由として『『言いたくない』を無理に聞く必要はない。だから、書くまで待とう、ということになった』と述べている。災害は被災した一人ひとりにとって、個別的で多様な経験であることはもちろんだが、一方で、地域全体を巻き込む集合的な出来事でもある。そのため、被災の経験は皆が了解可能な、共

通の「被災体験イメージ」に沿うような表現に収斂される傾向があり、そこから逸脱すると想定される経験は、拒絶されるのではないか、という恐れもあり、表現されにくい（高森・諏訪，2013）。そのような経験を拾い上げるために、「はじまりのごはん」では、あえて声をかけずに、気兼ねなく「つぶやき」を書けるような空間を作っている。

（3）「キャプション」を複数形にする

「どこコレ？」と「はじまりのごはん」の違いとして、もう一つ特筆すべき特徴は、来場者が付箋紙を重ねていくことを通じて達成される目的にある。佐藤さんは、『どこコレ？』はキャプションを一本化する作業で、『3月12日ははじまりのごはん』はキャプションを複数形にする作業だと定義している。「どこコレ？」では、写真にまつわる情報を付箋紙に記し、貼付することで、その写真が撮影された場所や時期を確定すること、言い換えると、一つの「正解」を見つけることが目指されている。一方、「はじまりのごはん」では、貼付される付箋紙群から、一つの「正解」を導き出すのではなく、異なる体験記述（キャプション）を無限に増やすこと、言うならば、「正解」を拡張することを志向している。このような、「はじまりのごはん」が目指す「正解の拡張」は、公文書館や図書館を源流とするアーカイブズ学の見地を採用する、伝統的な災害アーカイブのアプローチとは大きく異なる。伝統的な災害アーカイブにおいて、集められた資料は、資料管理の観点から、それぞれに客観的で正確な情報を過不足なく付帯させることが求められ、「恣意的」と判断される情報はできるだけ排除される。これに対応させるならば、「はじまりのごはん」は、個別の資料に対して、主観的で、正確とは必ずしも言い切れない情報を無限に付帯させる作業である、といえるだろう。

3. 「減災×学びプロジェクト」の写真をめぐる災害アーカイブ活動

2013年12月、震災から19年目を目前に迎えよう

とする頃、神戸にある「人と防災未来センター」にて、「いま、撮影する『阪神・淡路大震災』 震災を迫体験する方法として、『定点観測撮影』を考える」と題した企画展が開催された（図1）。筆者は当時、同センターが所蔵する震災資料の収集・保存・公開の実務担当として勤務し、この企画展の主担当であった。

この企画展は、筆者がある一冊の写真集を見つけたことから始まる。『翔け 神戸 阪神・淡路大震災の定点観測』と題されたこの冊子は、震災から約5年半が経過した2000年9月に、大仁節子さんという一人の女性の手によって自費出版されたものであった。巻末に記された著者近影には、「大仁節子 神戸市に生まれる77歳」と言葉少なに文章が添えられていた。この冊子には、彼女が撮影した阪神地域の震災直後と、同じ場所を約3年～5年の間に定点観測撮影した全193か所、386枚の写真が、彼女が添えたキャプションとともに収録されている。一人では到底行えないような、執念ともいえる彼女の活動と、そこから伝わる思いを冊子から感じた筆者は、ここに収録された写真群を展示に生かすことはできないかと考えた。出版元に問い合わせると、彼女は2010年に既に亡くなっていることが分かった。企画展では、彼女が残した写真のうち、神戸の中心地である三宮を含む神戸市中央区



図1 企画展「いま、撮影する『阪神・淡路大震災』」ちらし（人と防災未来センター 提供）



写真3 定点観測撮影会の様子

と、彼女が暮らしていた神戸市東灘区森南町を中心に、撮影された場所を探し、2013年現在に再撮影したものを加え、展示することにした。企画展の制作にあたって、立命館大学の山口洋典准教授に協力を請い、同大学の通年プログラム「減災×学びプロジェクト」を受講する学生10名とともに、大仁さんが撮影した写真の場所を同定し、新たに撮影する試みを行った。

2013年8月の2日間にわたって行われた撮影会では、一見すると、まち歩きをしているような和気藹々としたムードで、大仁さんの足跡が辿られていった(写真3)。

簡単に撮影場所が見つかると思われるような場所でも、「同じ場所を同じ高さ、同じ角度から撮影する」という、定点観測写真の撮影の難しさに直面し、試行錯誤を繰り返した。場所の検討がつかない写真を丹念に見た結果、現在の場所のヒントとなるような目印を見つけ、撮影場所を同定できたときには、達成感があった。撮影会の参加者は、筆者を含め、この活動に参加した者は皆、大仁さんと面識はない。また、参加した学生のほとんどは、阪神・淡路大震災を経験していない。しかし、撮影を重ねるうちに、参加した学生たちから、大仁さんの背格好や、撮影しそうなポイント、そして、それらから想像する、大仁さんが経験した震災について、言葉が交わされていった。撮影会では、特定を試みた中央区20か所、森南町29か所のうち、森南町の6か所を除く、43か所を写真に収めること

ができた。

この企画展は後に、せんだいメディアテークをはじめ、各所でその一部が展示された。そして、現在は人と防災未来センターから写真の利用許可を受けた上で、「減災×学びプロジェクト」講座として毎年夏に定点観測撮影会を行う形で、活動が続けられている。

では、この一連の実践を災害アーカイブ活動として捉えると、どのように特徴づけることができるだろうか。

(1) 写真に写っていない「撮影者」を知覚する

「減災×学びプロジェクト」では、定点観測写真の再撮影という行為を通じて、大仁節子さんという個人の視点に、自らの視点をできるかぎり一致させようとする行為が試みられる。そして、この作業は、参加者同士が言葉を交わしながら、何度も繰り返し行われる。こうして参加者たちは、彼女がかつて見た風景を手掛かりにして、彼女が撮影時に立った位置、視点の高さ、視線の方向を同定することを目指す。このことは、撮影者である大仁さんの身体感覚を参加者たちが追体験しようとする試みであるといえる。実際に定点観測会に参加した学生の一人は、以下のような感想を記述している(補注3)。

大仁さんの写真の場所を同定し、今の写真を撮っていく中で、感じるがありました。それは、大仁さんの姿です。まず172cmの私が普通にカメラを構えると、視点が高すぎるのです。胸辺りにカメラを構えるという不思議な撮り方をしながらも、当時大仁さんが撮影されていた様子が浮かぶようでした。それはとても不思議な経験でした。大仁さんにお会いしたこともないのですが、なぜか撮影している姿が思い浮かび、そして一緒に回っているような感覚がありました。その中で、大仁さんはどのような思いで撮影していたのだろう、と考えていました。

この感想をはじめとして、撮影行為を通じて、出会った事のない大仁さんの存在を感じたと記述する学生が大半を占めた。通常、災害アーカイブの資料としての定点観測写真は、写真に写り込んだ事物が変化しているか否かを見比べることで、街並みの変遷をはじめとした、復旧・復興のハード面の変化を見る際に使用されることが多い。しかし、「減災×学びプロジェクト」による定点観測撮影は、写真に写り込んだ事物の変遷を確認すること以上に、写真に映り込むことのない、撮影した個人へと意識が向けられ、その身体感覚を追体験することで、撮影者の心の変遷を辿ろうとする試みであるといえるだろう。この特徴は、「かつてここで震災があり、被災した人がいた」という当然のことを、確かなリアリティを伴って知覚することに通じるのではないだろうか。

(2) 不在の他者による活動を引き継ぐ

「減災×学びプロジェクト」が行った活動は、大仁さんという個人が行った、震災当時の様子と、その後を写真に保存し、伝えようとする災害アーカイブ活動を再開させる試みと捉えることもできる。参加した学生の一人は、最初は「昔の写真と今の神戸の街の間違い探しをしているような感覚」だったが、撮影が進む中で以下のような感覚を持ったと記している。

大仁さんが撮った写真の構図や画角に合わせて撮影しようとしてみんなで工夫しているうちに、大仁さんはどの場所から、どんな体勢で写真を撮ったのか、身長はどのくらいかなどを考えるようになり、「これって大仁さんがやったことを引き継いでるんやな」と漠然と思うようになりました。

この活動では、再撮影を試みるだけでなく、大仁さんが写真集を制作する際に行ったように、学生たちによって新たに撮影された写真にキャプションを付ける作業も行われた。これらの一連の活動は、大仁さんという不在の他者が行った災害アーカイブ活動

を、すでに閉じられた「完成」された活動として捉えるのではなく、いまだ開かれている「未完」の活動として捉え直し、その続きを学生たちが引き継ぎ、活動を再開させたと意味付けることもできるだろう。また、この活動はかつて、大仁節子さん個人の取り組みであったが、現在は多くの学生たちが関わる集合的な活動へと変化している。このことは、「誰か」という個人の災害アーカイブ活動を、最初に活動を行った個人（この活動における大仁さん）も含む、「私たち」の災害アーカイブ活動として捉え直した取り組みであるといえる。

4. 「開かれた」災害アーカイブ活動の可能性

本論文で紹介した仙台と神戸、2つの都市部で行われている災害アーカイブ活動は、この活動に誰もが参加できるという、災害アーカイブのコミュニティの裾野を広げる可能性を生み出している。どちらの取り組みも、個人が撮影した写真をもとにして、撮影した当事者だけではなく、様々な背景を持つ人々が、思い思いに言葉を重ねており、多様な体験や感覚を言葉にして表現する場を提供している。また、このように「開かれた」災害アーカイブ活動は、写真そのものや、写真から想起され、言語化された表現の集合体から、共通の問題点や教訓を導き出すことを主たる目的にはしていない。むしろ、想起された多様な記憶は互いに関連付けられながらも、情報としての価値の優越は無く、並存している。この特徴は、情報を網羅的に収集し、集められた情報から防災・減災につながる教訓を抽出することを目的とする災害アーカイブとは異なる志向性をもつものだといえる。

本論文で紹介した災害アーカイブ活動は、個別的な経験の断片から、さらに個別的な断片を生み出す、対話の場としての機能を持っている。このように、誰もが参加できる可能性を持つ災害アーカイブ活動は、災害の経験を次世代に伝えるという、災害アーカイブの最も基本的で、最も困難な希望を達成するための大きな力となるのではないだろうか。写真をめぐる「開か

れた」災害アーカイブ活動は、従来のアーカイブズ学の視点を踏襲するデジタルアーカイブの取り組みとともに、活動のさらなる充実と継続が求められている。

謝辞

本論文は2014年度生協総合研究所の助成を受けて作成された。また、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台に関する写真提供、インタビューをはじめ、同法人の佐藤正実さんに多大なご協力をいただいた。ここに記し、感謝申し上げます。

補注

- (1) 多くのボランティアによって各地で行われた写真返却活動は、写真家の浅田政志と、編集者の藤本智士による約2年間にわたる取材をもとに制作された『アルバムのチカラ』(2015)にその詳細が描かれている。
- (2) インタビューは2015年3月20日に仙台市内で行われた。
- (3) 定点観測撮影終了後、参加した学生から文字数無制限、様式自由で撮影時の感想を寄せてもらった。そして、寄せられた感想も企画展の一部として展示した。

参考文献

- 1) 国立国会図書館(2015), ひなぎく NDL 東日本大震災アーカイブ, <http://kn.ndl.go.jp> (2015-04-12).
- 2) NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台(2012), 3.11 キラクのキログ 市民が撮った 3.11 大震災 記憶の記録
- 3) 高森順子・諏訪晃一(2014), 災害体験の手記集の成立過程に関する一考察 —「阪神大震災を記録しつづける会」の事例から—, 実験社会心理学研究, 54, 1, 25-39.
- 4) 藤本智士・浅田政志(2015), アルバムのチカラ, 赤々舎